

氏名	江原 由美子
学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第4179号
学位授与の日付	平成22年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当)
学位論文題目	「ーモ」型接続助詞による逆接表現の展開
学位論文審査委員	主査・教授 江口 泰生 教授 辻 星児 教授 宮崎 和人 教授 田仲 洋己 准教授 京 健治

学位論文内容の要旨

日本語逆接表現の中には、「ーモ」という形を含む接続助詞が多くみられる。例えば、古代語では、トモ、トイフトモ、ドモ、トイヘドモ、現代語では、テモ、ケレドモ、トシテモ、トモ、ヨウトモなどである。

本論文はこれら「モ型接続助詞」と称し、個々の形式が条件表現においてどのように使用されているか、それぞれの用法や働きを精査することによって、日本語の逆接条件表現において、モ型接続助詞の働きを明らかにすることを目的としたものである。

紀要2本を含む公刊論文4本と、全国学会発表要旨2本を含む4回の学会発表要旨で構成され、A4版100頁(原稿用紙換算400枚)の論文である。章立ては以下のとおりである

序章

- 第1章 先行研究の諸相
- 第2章 ド・ドモの機能
- 第3章 古代日本語のトモの機能と史的展開
- 第4章 トモからテモへ
- 第5章 トイヘドモの文法化と意味・機能
- 第6章 現代日本語のテモの機能
- 第7章 モの付加と逆接化

終章

参考文献

序論において、本論文の目的・対象が系統立てて述べられ、第1章は古典語や現代日本語の先行研究を丹念に調査し、「逆接」の定義について概観し、古典語研究と現代語研究の両方を見通す必要があること、従来見当されてこなかった語形の分析の必要があること、モ型接続助詞の意味や用法の問題点の指摘を行った。

第2章「ド・ドモの機能」では、古代語で逆接確定条件を表す接続助詞ドとドモを対象とした。

- ・女、いとなしく、後にたちてをひゆけど、えをいつかで、清水のある所に伏しにけり。(伊勢)
- ・宮司、さぶらふ人々、みな、手を分かちて求めたてまつれども、御死にもやしたまひけん、え見つけたてまつらずなりぬ。(竹取)

そして従来、文体差や位相差だとされてきた二形式に、次のような構文上の差や機能差があることを指摘した。

- ・ドは、対等の資格に立つ、均衡的な事態の対立を示している。
- ・ドモの前件は、多回的な事態や質的に甚だしい事態となっており、ドモは、不均衡的な、齟齬のある事態の対立を提示している。

この二形式の違いは、他にも同類のものがあることを提示するもの働きによって生じていると結論づけた。

第3章「古代日本語のトモの機能と史的展開」では、逆接仮定条件を表す接続助詞トモを用いた文(以下、トモ文と称する)の考察を行い、その意味的特徴として、以下の三点を指摘した。

- ①「逆接条件性」……前件から期待される事態に反する事態が、後件となっている。
- ②「含意性」……前件以外の事態でも後件の実現を想定可能である。
- ③「前件の極値性」…言語化されている事態の展開は、当該文脈で想定可能な事態の展開のうち、実現する可能性が最も低いものである。

また、これらのうち、②「含意性」に着目して、古代語のトモ文と中世末期・近世初期のトモ文を調査した。そして、トモ文には、「含意性」のあるタイプから、「含意性」を考えにくいタイプへとという変化が生じていると考えられることを述べた。

第4章「トモからテモへ」では、逆接仮定条件を表す主要形式が、古代語のトモから、現代語のテモへと移り変わったことについて分析した。トモとテモは、『虎明本狂言集』と近松の世話物浄瑠璃の間で勢力関係が逆転しており、形式交替は、近世中期頃に生じたと結論づけた。また、中世末期・近世初期において、衰退しつつあるトモでは「含意性」が希薄になっていること、新しく成立したテモでは、その背景に恒常的・一般的な性格があったのではないかと結論づけた。

第5章「トイヘドモの文法化と意味・機能」は、逆接表現の研究対象にされてこなかったトイヘドモを対象とし、その用法や意味を明らかにした。

第6章「現代日本語のテモの機能」では、現代語の接続助詞テモについて論じた。

- ・こんな風だから、入社後四年たって、当然平社員で、三十年たってもたぶん平社員だろうと自覚するに至っていた。(女社長)

テモは、逆接仮定条件と逆接確定条件の両方に用いられているが、共通する特徴として、①「逆接条件性」、②「含意性」、③「前件の極値性」によって記述されると結論づけた。それぞれの内容は、第3章でトモを対象として指摘したものと同一である。

第7章「モの付加と逆接化」では、現代語の接続助詞ナガラとナガラモについて論じた。ナガラには、〈付帯状況〉と〈逆接〉の二つの用法があるが、〈付帯状況〉を表すナガラにモを付加してナガラモとすると、〈逆接〉の読みが強くなる。この現象について、ナガラとナガラモの構文上の特徴や機能から考察した。

終章では、本論文をまとめ、今後の課題と展望を述べた。本論文が対象とした「一モ」型の接続助詞においては、「逆接条件性」は古代語と現代語とで相違はないものの、「含意性」や「前件の極値性」では相違があること、この三つの観点によって、古代語と現代語を分析する共通の視座を見出せ

るのではないかということ述べた。またトイヘドモのように、これまで等閑視されてきた周遍的な表現形式の意味・用法を明らかにした。

学位論文審査結果の要旨

審査会は平成22年1月21日6時より文学部会議室で開催した。委員は主査江口泰生、近現代日本語の専門家である京健治、言語学の辻星児、現代日本語文法の専門家である宮崎和人、本論文が古典文学作品からの例を対象としているので日本古典文学の専門家である田仲洋己、計5名で審査会を構成した。

まず本人からの学位請求論文の概要を、特に主張したい点などとあわせて説明を受け、また予備論文からの進展状況の説明がなされた。

次に各審査委員からの質疑応答が行われた。これらを通じて以下の諸点が認められた。

第一に、本論文はモを含む接続表現の特性を明らかにして、そこに助詞モの影響を指摘した点、さらに「含意性」「極値性」などの三つの視点によって、モ型接続助詞の意味や用法を一貫した視点で説明してみせた点に独創性があることである。

第二に新たな発見・新見が多いことである。平安時代のド・ドモに意味の違いがあること、トモが次第に用法を変えていくことやその時期、トイヘドモが逆接表現として文法化していくこと、テモの成立、付帯状況のナガラにモが接続して逆接表現に傾くことなどの現象を指摘し、それらについて具体例に基づいて論証されていることが認められた。

第三に、用例を徹底的に収集し、一例一例解釈を加えながら分類するといった実証的な方法で全体が貫かれている点である。用例収集の範囲は平安時代の文学作品から室町時代の抄物まで広範囲に及び、それらを解釈し、分類していき、さらにそれらを抽象化して整然とした記述を行おうとする労力は賞賛に値する。

一方で独自性を打ち出そうとするあまり、論旨の慎重さを欠く傾向が見られたり、先行研究との共通点や相違点が十分に説明されていないという問題点も指摘された。モ型逆接表現すべてを全ての時代において扱おうとする意欲は評価できるものの、問題がやや拡散した観も否めない。逆接表現の他形式モ・ド・ドモ・イヘドモ・ヲ・モノヲなどが共時的にどのように使い分けられているかを描く必要があるなど、新たな課題の提示もあったが、これはおそらく氏が今後、一生をかけて取り組むべき課題となろうと思われる。

審査会を経て、改めて豊かな問題点が潜む逆接表現研究の重要性が認識され、本論文が明らかにした結論は博士（文学）の学位論文として十分に評価に値するものであることが確認された。

以上の審査の結果、博士（文学）の学位を認定することについて全員一致で合意した。